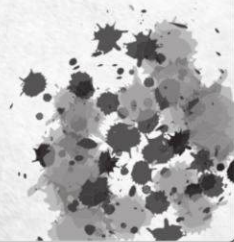




カール・マルクス

～社会主義の申し子～



時代背景

産業革命が進んでいたイギリス・フランスでは、資本主義の矛盾が現れ始め、初期社会主義思想家が登場していた。ちなみに、この初期社会主義にマルクスは該当しない。

遅れる形で登場したマルクスであったが、資本主義の矛盾を科学的に分析したことから、自分の社会主義を「^[1]社会主義」と区別して呼んでいる。マルクスが現状の世界に何を矛盾に感じ、どんな理想を説いていったのか、また彼の思想がどのように現代世界に影響を与えているのかを、学んでいこう。

偉人の生涯



Karl Marx 1818～1883 ドイツ 経済学者・哲学者

主 著 『共産党宣言』『²』 『ドイツ・イデオロギー』

Keyword 「唯物史観」「労働疎外」「社会主義革命」

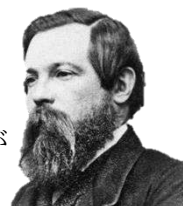
西 暦	年齢	生 涯
1818	0	プロイセン領トリールで出生
1841	23	イエナ大学から学位を受け、哲学博士となる
1847	29	エンゲルスとともに「共産主義者同盟」に加入
1848	30	『 ³ 』刊行
1867	49	『 ² 』第1巻を刊行
1883	65	ロンドンの自宅で椅子に座ったまま死去

★マルクスの残念エピソード①『資本論』という本を書きながらも、自分のお金の管理は出来ない！

マルクスは裕福な家庭に生まれ、過保護に育てられた。大学時代も仕送りをたくさんもらっていたが、金遣いが荒くすぐに困窮していたようだ。子どもには借金取りが来たら「お父さんはいません」と言いなさいと教えたり、大金の遺産が入っても豪邸を買ってすぐに使い切るなど、とにかくお金の管理に疎かったようだ。

★マルクスの残念エピソード② 大人になっても親友のエンゲルスを頼る日々

彼の金遣いの荒さは、大人になっても変わらず。親友で『資本論』の共著者でもあるエンゲルスから、何度も経済的援助を送ってもらっていたそう。それだけにとどまらず、マルクスが妻以外の女性との間に子供を作ってしまった時も、その子の面倒をエンゲルスが見ていたという。そんなマルクスを許せるほど、彼の才能に惚れ込んでいたようだ。



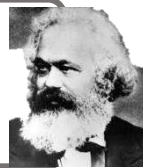


偉人の功績・思想

★労働疎外 「資本主義社会の労働は人間らしさを失うものである！」

①労働生産物からの疎外	生産したものを自分で得られず、他人のものになる
②労働からの疎外	労働が単なる手段や、強制になっている 本来はもっと楽しいものであるべきだ…
③類的存在からの疎外	本来、人間は社会的連帯の中で生きる「 ⁴ 」だが、 現代の労働では連帯が感じられず、疎遠なものになってしまう
④人間からの疎外	他者との関係が喜びの無い疎遠なものになってしまう

本来、労働とは「人間が人間であることを確かめる行為」なんだ。
労働とは人間の生きがい。だが今の労働ではそれが達成されない。
資本主義を廃止して、人間性の回復を目指そう！



★社会主義革命 労働者階級による革命を起こそう！

これまでの歴史は階級闘争の歴史が繰り返されてきたことによる。そして、労働者が資本家に搾取される時代において、今こそ労働者階級が立ち上がるべきだ！と説いた。労働者（=⁵）階級は団結して革命を起こし新たな社会主義国家を作る事を説いた。彼の名著である『共産党宣言』は、「万国のプロレタリア、団結せよ」という言葉で結ばれている。

★世界へ広がるマルクスの思想

マルクスの思想は、各国で修正されながらも展開していった。武力による革命を否定し、議会制民主主義を通じて社会主義を実現しようとする思想や、マルクスの死後、レーニンによって発展したマルクス・レーニン主義などが生まれた。

column 📖 「ソ連」～世界初の社会主義国家～

マルクスが主張した社会主義は世界へ広がり、ついには社会主義を基盤とする国家としてソビエト社会主義連邦が誕生した。しかし、ソ連はマルクスの理想とはかけ離れた国家だと言われている。ソ連や東欧は所有を国有化することを図った。ソ連の場合は全面的国有化といって、企業も土地も国のものにしてしまった。しかし、全面的に国有化してしまうということは、国家による独裁を意味する。当時権力を持っていた共産党による私有状態となっていた。

経済面では、自由競争をしないことにより、失業や倒産のリスクは無く、実際に1929年の世界恐慌でもソ連は影響を受けなかったという。しかし、競争がないことが「労働意欲の低下」や「生産の効率悪化」をもたらし、最終的に1991年に消滅することとなった。

現存する社会主義国家は中国・北朝鮮・ベトナム・ラオス・キューバのみとなっている。

社会主義の国は幸せなのだろうか…？



偉人から学ぶこと

Think 社会主義は現代に取り入れるべきか

では実際に自分たちが社会主義国家の一員だとしたら…ということを考えてみて欲しい。キューバでは給料は平等、休みも保障され、格差の無い状態。病院や老後の生活もサポートが充実している。あなたはこの国での生活に何を思うか？ここでの暮らしを想像して、率直な感想を書いてみよう。

【自分の考え】

【他者の考え】

-
-

実際にキューバを訪れた旅行者はこう綴っている。

キューバの人々は、一見貧しい暮らしのように見えるが、陽気で明るく、楽しそうに暮らす様子が印象的であった。特徴的だったのは、資本主義に憧れる若者が多かったこと。ネットなどでアメリカの文化を知っており、それらに憧れる若者は自力でお金を稼ごうと街で外国人向けに商売をしていた。みんな平等な社会なのに、「自分は違うぞ！貧しくない！」と必死になっているように見えた。基本的にはみんな平等であるんだけど、市街地に行けば民宿や自営業を外国人に向けて商売しており、自分自身で「外貨」を稼ぐ者たちが裕福な暮らしをしていた。少なからず格差は存在していた。

この記事を見ると、やはり人間である以上、欲望があるのは当然であり、他者と比較するのも当然のことである。自由競争を促す資本主義経済は、「誰かよりも良くなりたい」「より稼いで裕福な暮らしをしたい」という人間の思いに沿った自然な形であり、だからこそ世界各国で採用されていると言える。

しかし、現代社会に目を向けると、経済格差は広がり続け、2008年にはリーマンショックが発生。アメリカ経済の影響が世界中に波及し、日本でも大きな打撃を受けることになった。不況の中で失業や倒産が起こったり、働きすぎの過労が問題になるなど、日本経済や労働状況は決していいものとはいえない。そんな中で、社会主義が持つ理念は累進課税や社会保障を通じて格差の弊害を解決するものとして活かされている。

日本は今後、どのように進むべきなのだろう？具体的なアイデアがあれば、それも書いてみよう。

【立 場】 社会主義の考えを取り入れるべき ・ 現状の資本主義を推進するべき

【理 由】

column キューバの人々から「幸せ」を学ぶ

話は戻って、キューバの生活に関する記事の下線部に注目して欲しい。

なぜキューバの人々は貧しい暮らしを楽しそうに送っていたのだろうか？

その理由として考えられることを書いてみよう。そこに「幸せ」のヒントが隠されているかもしれない。

【自分の考え】

【他者の考え】

-
-
-

これは人それぞれの考えなので正解はないが、個人的な見解を2つ。

まず1つは「誰かと比べない」ということ。人は周りが気になり、無意識のうちに比較をしてしまう。

だからこそ、自分の足りない部分が気になり、現状に満足できなくなってしまうのではないか。

その点キューバの人々は、皆が同じ条件で生活をしているため、劣等感を感じる事が少ないのかもしれない。私たちにとっても、競争心や向上心は大切ではあるが、過剰に持ち過ぎない方が幸せなのだろう。「人は人、自分は自分」という考え方が、自分を好きになる生き方に繋がる。

2つめは「些細な幸せに気づく」ということ。「幸せ」について考える時、先進国よりも、

キューバの様な途上国の人々の方が、ある意味幸せそうに思ってしまう。それは、なぜかというと、

幸せの基準値が低いから。「蛇口から飲める水が出る」「シャワーからお湯が出る」「スリ、ぼったくり、強盗の心配がない」「食べものが安全」「安心して寝られる」など…これらは、日本では当たり前のことだが、途上国はそうではない。出来ないことが多い分、幸せを感じるチャンスが多くなり、結果として陽気で幸せそうに見えるのかもしれない。私たちも、普段当たり前のようにあることへ感謝することで小さな幸せを積み重ねることができるはずだ。

社会主義で平等な国では競争が無く、人間の欲望には逆らうことになる。

ただ、キューバの人々のように、競争がないからこそ得られる幸せもあるのではないか。

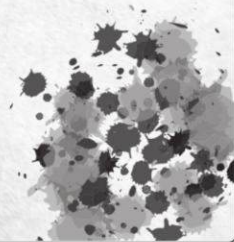
今後世界はどう進むべきか。

答えは1つではないからこそ考えることは面白い。



カール・マルクス

～ 社会主義の申し子～



時代背景

産業革命が進んでいたイギリス・フランスでは、資本主義の矛盾が現れ始め、初期社会主義思想家が登場していた。ちなみに、この初期社会主義にマルクスは該当しない。

遅れる形で登場したマルクスであったが、資本主義の矛盾を科学的に分析したことから、自分の社会主義を「^[1] **科学的**」社会主義」と区別して呼んでいる。マルクスが現状の世界に何を矛盾に感じ、どんな理想を説いていったのか、また彼の思想がどのように現代世界に影響を与えているのかを、学んでいこう。

偉人の生涯



Karl Marx 1818～1883 ドイツ 経済学者・哲学者

主 著 『共産党宣言』『² **資本論**』『ドイツ・イデオロギー』

Keyword 「唯物史観」「労働疎外」「社会主義革命」

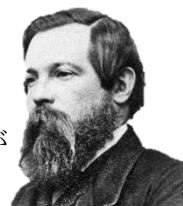
西 暦	年齢	生 涯
1818	0	プロイセン領トリールで出生
1841	23	イェナ大学から学位を受け、哲学博士となる
1847	29	エンゲルスとともに「共産主義者同盟」に加入
1848	30	『 ³ 共産党宣言 』刊行
1867	49	『 ² 資本論 』第1巻を刊行
1883	65	ロンドンの自宅で椅子に座ったまま死去

★マルクスの残念エピソード①『資本論』という本を書きながらも、自分のお金の管理は出来ない！

マルクスは裕福な家庭に生まれ、過保護に育てられた。大学時代も仕送りをたくさんもらっていたが、金遣いが荒くすぐに困窮していたようだ。子どもには借金取りが来たら「お父さんはいません」と言いなさいと教えたり、大金の遺産が入っても豪邸を買ってすぐに使い切るなど、とにかくお金の管理に疎かったようだ。

★マルクスの残念エピソード② 大人になっても親友のエンゲルスを頼る日々

彼の金遣いの荒さは、大人になっても変わらず。親友で『資本論』の共著者でもあるエンゲルスから、何度も経済的援助を送ってもらっていたそう。それだけにとどまらず、マルクスが妻以外の女性との間に子供を作ってしまった時も、その子の面倒をエンゲルスが見ていたという。そんなマルクスを許せるほど、彼の才能に惚れ込んでいたようだ。

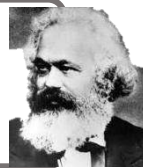


偉人の功績・思想

★労働疎外 「資本主義社会の労働は人間らしさを失うものである！」

①労働生産物からの疎外	生産したものを自分で得られず、他人のものになる
②労働からの疎外	労働が単なる手段や、強制になっている 本来はもっと楽しいものであるべきだ…
③類的存在からの疎外	本来、人間は社会的連帯の中で生きる「 ⁴ 類的存在」だが、 現代の労働では連帯が感じられず、疎遠なものになってしまう
④人間からの疎外	他者との関係が喜びの無い疎遠なものになってしまう

本来、労働とは「人間が人間であることを確かめる行為」なんだ。
労働とは人間の生きがい。だが今の労働ではそれが達成されない。
資本主義を廃止して、人間性の回復を目指そう！



★社会主義革命 労働者階級による革命を起こそう！

これまでの歴史は階級闘争の歴史が繰り返されてきたことによる。そして、労働者が資本家に搾取される時代において、今こそ労働者階級が立ち上がるべきだ！と説いた。労働者（=⁵ プロレタリア）階級は団結して革命を起こし新たな社会主義国家を作る事を説いた。彼の名著である『共産党宣言』は、「万国のプロレタリア、団結せよ」という言葉で結ばれている。

★世界へ広がるマルクスの思想

マルクスの思想は、各国で修正されながらも展開していった。武力による革命を否定し、議会制民主主義を通じて社会主義を実現しようとする思想や、マルクスの死後、レーニンによって発展したマルクス・レーニン主義などが生まれた。

column 📖 「ソ連」～世界初の社会主義国家～

マルクスが主張した社会主義は世界へ広がり、ついには社会主義を基盤とする国家としてソビエト社会主義連邦が誕生した。しかし、ソ連はマルクスの理想とはかけ離れた国家だと言われている。ソ連や東欧は所有を国有化することを図った。ソ連の場合は全面的国有化といって、企業も土地も国のものにしてしまった。しかし、全面的に国有化してしまうということは、国家による独裁を意味する。当時権力を持っていた共産党による私有状態となっていた。経済面では、自由競争をしないことにより、失業や倒産のリスクは無く、実際に1929年の世界恐慌でもソ連は影響を受けなかったという。しかし、競争がないことが「労働意欲の低下」や「生産の効率悪化」をもたらし、最終的に1991年に消滅することとなった。現存する社会主義国家は中国・北朝鮮・ベトナム・ラオス・キューバのみとなっている。

社会主義の国は幸せなのだろうか…？



偉人から学ぶこと

Think 社会主義は現代に取り入れるべきか

では実際に自分たちが社会主義国家の一員だとしたら…ということを考えてみて欲しい。キューバでは給料は平等、休みも保障され、格差の無い状態。病院や老後の生活もサポートが充実している。あなたはこの国での生活に何を思うか？ここでの暮らしを想像して、率直な感想を書いてみよう。

【自分の考え】

稼ごたい意欲がそがれる、生きがいがなくなる、金もうけのために犯罪を犯す恐れ

【他者の考え】

- **その環境で過ごせば慣れてしまうのでは？ 安定した生活であれば居心地はいいかもしれない**
- **労働に対して適当になってしまう、自分だったら競争社会で努力したい**

実際にキューバを訪れた旅行者はこう綴っている。

キューバの人々は、一見貧しい暮らしのように見えるが、陽気で明るく、楽しそうに暮らす様子が印象的であった。特徴的だったのは、資本主義に憧れる若者が多かったこと。ネットなどでアメリカの文化を知っており、それらに憧れる若者は自力でお金を稼ごうと街で外国人向けに商売をしていた。みんな平等な社会なのに、「自分は違うぞ！貧しくない！」と必死になっているように見えた。基本的にはみんな平等であるんだけど、市街地に行けば民宿や自営業を外国人に向けて商売しており、自分自身で「外貨」を稼ごうと裕福な暮らしをしていた。少なからず格差は存在していた。

この記事を見ると、やはり人間である以上、欲望があるのは当然であり、他者と比較するのも当然のことである。自由競争を促す資本主義経済は、「誰かよりも良くなりたい」「より稼いで裕福な暮らしをしたい」という人間の思いに沿った自然な形であり、だからこそ世界各国で採用されていると言える。

しかし、現代社会に目を向けると、経済格差は広がり続け、2008年にはリーマンショックが発生。アメリカ経済の影響が世界中に波及し、日本でも大きな打撃を受けることになった。不況の中で失業や倒産が起こったり、働きすぎの過労が問題になるなど、日本経済や労働状況は決していいものとはいえない。そんな中で、社会主義が持つ理念は累進課税や社会保障を通じて格差の弊害を解決するものとして活かされている。

日本は今後、どのように進むべきなのだろう？具体的なアイデアがあれば、それも書いてみよう。

【立 場】 社会主義の考えを取り入れるべき ・ 現状の資本主義を推進するべき

【理 由】

column キューバの人々から「幸せ」を学ぶ

話は戻って、キューバの生活に関する記事の下線部に注目して欲しい。

なぜキューバの人々は貧しい暮らしを楽しそうに送っていたのだろうか？

その理由として考えられることを書いてみよう。そこに「幸せ」のヒントが隠されているかもしれない。

【自分の考え】

みんな同じ状況であるからこそ、互いにいい環境を作りだそうとする姿勢になるのでは

【他者の考え】

- **自力でお金を稼ぐこともこっそりやることで、不満を解消できている？**
- **労働にやりがいがなくとも、それ以外の娯楽や趣味で生活を豊かにするよう努力している**
- **貧しい分、日常の小さな出来事に幸せを見出すことが出来ている**

これは人それぞれの考えなので正解はないが、個人的な見解を2つ。

まず1つは「誰かと比べない」ということ。人は周りが気になり、無意識のうちに比較をしてしまう。

だからこそ、自分の足りない部分が気になり、現状に満足できなくなってしまうのではないか。

その点キューバの人々は、皆が同じ条件で生活をしているため、劣等感を感じる事が少ないのかもしれない。私たちにとっても、競争心や向上心は大切ではあるが、過剰に持ち過ぎない方が幸せなのだろう。「人は人、自分は自分」という考え方が、自分を好きになる生き方に繋がる。

2つめは「些細な幸せに気づく」ということ。「幸せ」について考える時、先進国よりも、

キューバの様な途上国の人々の方が、ある意味幸せそうに思ってしまう。それは、なぜかというと、

幸せの基準値が低いから。「蛇口から飲める水が出る」「シャワーからお湯が出る」「スリ、ぼったくり、強盗の心配がない」「食べものが安全」「安心して寝られる」など…これらは、日本では当たり前のことだが、途上国はそうではない。出来ないことが多い分、幸せを感じるチャンスが多くなり、結果として陽気で幸せそうに見えるのかもしれない。私たちも、普段当たり前のようにあることへ感謝することで小さな幸せを積み重ねることができるはずだ。

社会主義で平等な国では競争が無く、人間の欲望には逆らうことになる。

ただ、キューバの人々のように、競争がないからこそ得られる幸せもあるのではないか。

今後世界はどう進むべきか。

答えは1つではないからこそ考えることは面白い。